

チャハマキ

1 形態と生態

- (1) 成虫の体長は約10mm、前翅の長さは10～15mmあり、夜間に活動し10日内外生存します。雌1頭当たり3～5卵塊を古葉の表面に産み付けます。
- (2) 卵塊は淡黄色で、長さ約10mm、幅が約5mmあり、1卵塊は平均130個の魚鱗状の卵粒からなります。卵期間は1～2週間で、気温が高いと早くふ化し、ふ化幼虫はすぐに分散、隣接した葉を次々につづり合わせて食害します。
- (3) 幼虫の体色は灰緑色で頭部は暗褐色です。幼虫期間は約30日ですが、越冬期は6か月近くになります。老齢幼虫は体長が約25mmになり、巻き葉内で蛹となり、1～2週間後に羽化して成虫となります。



写真1 雄成虫(左)と雌成虫



写真2 卵塊



写真3 老齢幼虫



写真4 蛹

2 被害の様子

- (1) 古葉をつづり合わせて、その中で葉を食害します。このため、樹勢が衰え新芽の生育に影響を及ぼします。1匹の幼虫が十数枚の茶葉をつづって加害することもあり、多発時には新芽が全く伸びず収穫皆無となることもあります。
- (2) 年間を通じて5月下旬～6月下旬にかけて発生する第1世代幼虫による被害が最も甚大になりやすい傾向があります。



写真5 多発生時の被害状況

3 発生について

- (1) 幼虫で越冬し、成虫は4月下旬～6月上旬に発生し(越冬世代)、以後世代を繰り返して年4回発生します。
- (2) 誘蛾灯での誘殺結果から、各世代の成虫発生時期と発生量は図1のとおりで、成虫の発生量は第1世代が最も多くなっています。
- (3) 9月中旬以降発生してくる第3世代成虫は、だらだら発生となり発生量も多く、防除時期のタイミングを逃

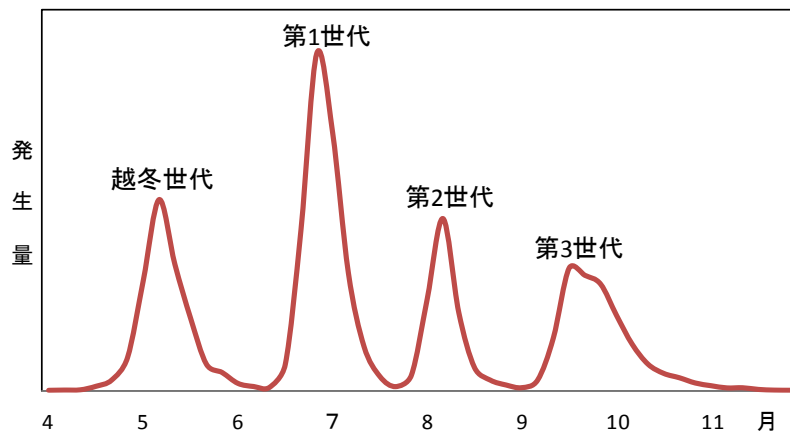


図1 成虫の発生消長 (誘蛾灯の誘殺数)

- (3) 9月中旬以降発生してくる第3世代成虫は、だらだら発生となり発生量も多く、防除時期のタイミングを逃しやすい傾向があります。翌年3月に春整枝を実施した時点で越冬世代幼虫の多発に気づくことが多いのですが、この時点では薬剤防除の効果はあまり期待できません。
- (4) 越冬世代成虫のピークは以前は5月下旬以降でしたが、近年一番茶摘採前の5月上旬にピークになることが多く、この場合第1世代幼虫の防除適期が一番茶収穫期と重なるため事実上防除の機会を逃してしまうので、6月に第1世代幼虫が多発する傾向にあります。

4 防除時期と防除方法

(1) 生物的防除

- ア 春整枝後に認められる越冬世代幼虫は多発していても老齢幼虫のため薬剤散布の効果はあまり期待できませんが鳥類等に多く捕食されるので、不必要な薬剤の使用は避けましょう。
- イ チャハマキに対する天敵微生物の一種である顆粒病ウイルスやBT剤を散布することにより、化学合成農薬を使わずに防除を行うことが出来ます。顆粒病ウイルスの場合は罹病虫 1頭/水 1リットル、散布量 200～300リットル/10aとし、展着剤を加用します。
- ウ 性フェロモン剤(ハマキコンーN、250本/10a 越冬世代成虫発生初期設置)によりチャハマキの交尾を連続的に阻害することにより、年間を通じて発生を抑制することが出来ます。

(2) 薬剤防除

- ア 若齢幼虫期をねらって薬剤散布を行うことが重要です。
- イ 通常散布量は 200リットル/10a としますが、ダニ剤との混用や越冬前防除時期等の摘採面より上に枝条が長く伸びている場合は 400リットル/10a を散布すると効果があります。

薬剤防除を実施する場合は、

- 最終有効年月内の農薬を使用し、ラベルに記載されている適用作物、使用時期、使用方法等を必ず確認してください。
- 適切な薬剤を選択し、病害虫が抵抗性を獲得しないように、同一系統薬剤の連続使用を避けてください。
- 農薬を散布する際は飛散しないよう対策を講じてください。

■ 発行 平成28年2月 埼玉県農産物安全課、一般社団法人埼玉県植物防疫協会

■ 問合せ先(原稿執筆)

埼玉県茶業研究所栽培担当 TEL04-2936-1351、埼玉県病害虫防除所 TEL048-539-0661



©埼玉県 2005

彩の国埼玉県